



## 彦根藩の御茶詰御用

「ずいずいづつころばし」の童歌で知られる御茶壺道中は、宇治の新茶を取り寄せる徳川將軍家の行事です。毎年四〜五月に幕府役人が江戸から宇治に茶壺を運び、その茶壺に宇治の茶師が新茶を詰め、再び役人が江戸に持ち帰るといふものです。

宇治から新茶を取り寄せることは、徳川將軍家だけでなく各大名家でも行われており、彦根藩でも、開始時期は不明ながら、江戸時代後期に御茶詰御用の呼び名で行われていました。これに関して、彦根藩大久保家文書（当館蔵）に二冊の記録が残っています。二冊とも、裏表紙の裏に貞毗（大久保孫左衛門家五代目）の印が捺されており、同人が作成したものと考えられます。

「宇治御茶詰年々御請下留」（写真①）



写真① 宇治御茶詰年々御請下留（当館蔵）

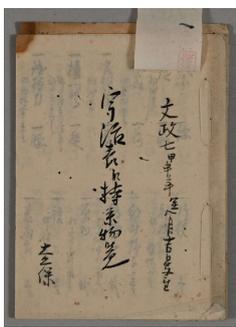
①は、享和三年（一八〇三）から文政七年（一八二四）のうち十四か年分の御茶詰御用の家老への報告書を書き留めたものです。この記録からは、使者となった藩士が茶壺を宇治まで運び、新茶を詰めた茶壺を彦根へ持ち帰る過程が読み取れます。

「宇治表江持参物覚」（写真②）には、御茶詰御用で宇治へ行く際に必要な持ち物が書き上げられているほか、移動の日程や、道中の出費なども記されています。

さて、これらの記録の内容を総合し、江戸時代後期の彦根藩の御茶詰御用の様子を復元してみましよう。四月のはじめ、家老から指紙（指示書）が届き、これを受けて使者となった藩士は準備を進めます。刀や鎧、挟箱、提灯、道中の衣類、

合羽などの雨具、蚊帳などの宿泊時に使う道具、炊事道具など、多くの品目が用意されました。また、連れて行く家来三人分の道具類も必要でした。この他、茶師への土産なども準備されます。

幕府の御茶壺道中より遅めの日程です。準備した道具類のほか、新茶を詰める茶壺や茶師への礼状を船に積み、彦根城の北に隣接する松原湊から数艘の船で天津まで移動します。天候不順で途中の湊に停泊することが多く、天津まで三〜四日かかるのが常でした。船は御水主（藩の船を扱う船乗り）計十名が操縦しました。労いとしてでしょうか、使者の藩士は御水主へ酒を送っています。天津で天津奉行から駕籠を借り、陸路で山科・六地藏を経由して宇治へ向かいます。天津から宇治までは一日程度で移動しました。宇治で茶師に茶壺を渡し、茶師が新茶を詰めて封をした茶壺を受け取るまで五日〜八日かかります。その



写真② 宇治表江持参物覚（当館蔵）

間、石清水八幡宮に参詣するなど、周辺の見物に行くこともありまし。 「宇治表江持参物覚」には「山城の国名所記」があれば持参することと書かれています。名所記を片手に見物を楽しんだのかもしれない。

茶師から茶壺を受け取った後は、行きと同じ経路で松原湊へ戻ります。松原には夜に着くことが多かったようです。翌日、茶壺を点検し、茶道方の役人に茶壺を渡します。この後、家老に報告書を提出して、御茶詰御用は完了します。

御茶詰御用は、彦根出発から帰着まで、およそ半月かかる用務でした。彦根藩井伊家が使用する宇治の新茶は、このようにして彦根にもたらされたのです。

【彦根城博物館学芸員 荒田雄市】

写真①の資料は、テーマ展「茶壺―武家の美意識―」で5月17日（金）〜6月18日（火）の期間、展示します（期間中無休）。